

おとなよりまさる子供の記憶力

「それにしても、幼児に漢字を与えるのは早すぎるのではないか」という意見がよく聞かれます。それで、そのことについても、しばらく考えてみたいと思います。

幼児は、肉体的に見ると、まことに弱々しく小さくて、頼りない存在です。また、精神的にも、未熟としか見えません。だから、私たちは、幼児のすべての能力を、ついそういう外見から、未熟で無能力なものと判断しがちです。しかし、最近の脳生理学の明らかにしているところでは、“記憶”をつかさどる大脳皮質の神経細胞は、生まれた時にすでに完成した状態にある、とされています。

つまり、生後間もない赤ちゃんでも、記憶という点では、未熟どころか、おとなと全く異なる状態にまで成熟している、ということです。だからこそ、生後わずか二、三年の間に、日常生活に事欠かないだけの言語能力を、身につけることができるのではありませんか。

外国に生まれ、外国に育った人は、大学の課程を済ませたほどの能力をもったおとなでも、日本に来住して、10年、20年もいるというのに、日本語を話す能力という点では、日本に生まれ、日本に育った三

歳の子供にも及ばないではありませんか。

外国人だから、先天的に日本語の発音がよくできない、というわけではありません。外国人でも、日本に生まれ、日本に育った子供は、二、三歳くらいで、やはり、日本人の子供と同じように、りっぱな日本語を話すようになります。

この事実は、少なくとも、言語能力においては、幼児の能力はおとなの能力にまさっていて、決して劣ることのないことを証明している、と言えます。